
something's missing

ナルミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

something's missing

【Nコード】

N8550J

【作者名】

ナルミ

【あらすじ】

中学時代のある出来事を境に、卑屈に生きる真茅翠。

高校二年生となった彼は、ある女の子と出会うことで、失ったものを徐々に取り戻していく。

そんな彼の日常をてきとーに描きます。

第1話（前書き）

どもナルミです。

以前はmissingというタイトルで、書いていましたが、内容と文章を多少変更したかったんで、書き直しました。

初心者ですので、気が向いたときに読んでいただけたら幸いです。

第1話

春。

それは、一つの終わりと一つの始まりの季節だとよく耳にする。

例えば、二浪の末、念願のいわゆる上流大学に合格したとか。例えば、クラス替えによって古い友人から、自分に見合う新しい友人を見つけるとか。例えば、優秀な新入社員の受け入れに会社の総意が祝っている外で、無能と判断された社員や還暦を迎えた世代が放擲されるとか。

大から小と、この世知辛い世の中では、おれでは計り知れない出来事が、いろいろな場所で起きている。

これらは、得体のしれない何かの力によって引き起こされている。

そして、その何かの力は例外なく、おれにも作用していた。

まるで神が下した神罰であるかのようなそれは、今のおれには避けようがなく、その圧倒的な暴力の前ではあまりに無力だった。

まあ、何か何かと大げさに語ってしまったてはいるが、その正体はただ高校一年生という肩書きが終わり、高校二年生という肩書きが始まるだけの『進級』という生きていれば、大体の日本人が経験する国民的行事なわけであって（国民的行事であっても、親族以外の間人は特に関心はない）、つまりは、おれは今日から高校二年生で、新学期を迎えたということだ。

もちろん、自分だけでなく周りの学園生もそうで、あの力には逆らえない。

登校中の彼らは、無やら眠やら多種多様な表情で隠してはいるが、皆、例の力の影響を受け、心では期待と不安でいっぱいのはずだ。あの先生が担任だったらとか、好きな人と同じクラスになりたいとか、あの人と離れたくないとか、そんなの。

何事も終わり、そして始まる。

だけど、本当の終わりとは死ぬことだけだと思う。人によっては、

その死んだものを忘れ去られたときこそが本当の死というけど、過程はどうあれ『死』は絶対に避けられない。この世知辛い世の中で、唯一の絶対なのだ。

またまた大げさに謳っているが、おれは別に哲学者でもないし、誰か身内が永遠の眠りについたわけでもないし、当然、おれ自身ですでに死んでいて、実は幽霊でした、なんて落ちもない。

しかし、それに匹敵するぐらい『終わり』に遭遇したことはある。自分より不幸な人間が聞けば「その程度のことなんかで」「自分なんて」と鼻で笑うだろう。実際、今の自分からすればなんてことない（少しはなんてことあるけれども）。しかし、あの頃の自分には、それほどまでにその『終わり』は辛かった……それだけのことだ。

そして、それはもう一度始まることはなく、別の、今の自分が始まっただけ……。

気づけば校門の前に立っていた。

考え事をしているうちに、いつの間にか学校に到着していたらしい。一種の夢遊病的な感覚だ。

きつと、登校中のおれの顔は、なんとも複雑な顔をしていたに違いない。

昔、優介に「お前は考え事が顔に出る」と言われたことがある。もちろん無意識的な領域なので自覚はないが、この癖のおかげで「嘘はつけない正直者」のレッテルを貼られた。しかし、おれだって人間だ。嘘をつくし、約束を破ることだってある。まあ、結果として名誉あるレッテルが抑止力となって、ダニの大きさ程度の小さな虚勢ほどなんだが。

話が逸れたけど、つまり、何が言いたいかというと、きつと恥ずかしい、哀れな人間みたいに見られたはずだ。登校中に百面相をする

男。そんな奴、おれだつてお近づきになりたくないから。

ネガティブな思考を振り払うかのように、頭をぶんぶんと横に振ると視界の端に、校庭の隅に佇む満開の桜を捉えた。

誇らしげに咲き誇る桜は、我々を差し置いて、まるで自らが主役であると感じ主張しているように映る。

この桜を見ていると、普段日蔭者を演じている自分が滑稽に思える。短い命なのだから、せいぜい今を楽しんでほしいものだ。

植物にだって例外はない。その内にきつと、例の力に押しつぶされてしまうのだから。

少々目を奪われてしまったが、軽く毒突き、生徒用玄関に足を向ける。

「なーに難しい顔しているんだ？ 翠」

「ん？」

突然声を掛けられ、反射的に振り向く。

「なんだ、優介か」

「ああ、優介様だ。相変わらず翠の髪はうざいな。パツツンにしたくなる」

優介はそう言つて、おれの無造作に育ってしまった、目を完全に覆うほどの前髪を指差す。

「これは表情を隠すために必要なんだ。顔っていうのは一番感情を表出するからね」

「それにも限度があるだろ。」

優介と最後に会つたのは春休み前だったから、久しぶりに目にしたのと、その期間に伸びた分があるため、一層そう感じたのかもしれない。

「慣れればそうでもないさ。それより、あれは何の騒ぎだ」

この話は終わり。そんな意味を込めて、生徒用玄関の方向を指さす。玄関には、何やらは人だかりの熱気が渦巻いていた。

「お前さ。進級と言えば、それとは切つても離せないものがあるだろ？ クラス替えだよ。あそこには掲示板があるだろ」

……そうだった。言われて気づいた。

「ああ。おまえは興味ないか」

「察してくれて助かるよ」

まったく以って、優介の言う通りだった。

大半の生徒が淡い期待を抱く出来事も、おれには関係ない。

何故関係がないか……。それを説明するには学級内の階級について語らないといけない。

位階級においてまず、第一に挙げられるのは上流階級に位置する人物だ。彼らは勉強と運動、どちらも得意とする完璧超人を自称することができ人物で、決まって顔の作りがよく、また優れていることを鼻にかけない（もちろん、中にはかける奴もいる）、なかなかの人格者だ。それ故に交友関係は広く、敵は少ない。

その下層には、勉強や運動やその他、何らかの取り得を有しており、それを巧みに駆使して、クラスの中核に取り入る者がいる。おれの唯一の友人、優介はここに位置する。彼は顔も運動も優れたものを持っているが、勉強は恐ろしく出来ない。しかし、限りなく最上層に近い人間だ。

そして、最下層の位置するのはその他の集合体だ。取り立てた才能もなく、勉強そこそこ、運動そこその凡人の名を冠するのが彼らだ。もちろん集合体なのだから、彼らは彼らの中で組織を作り、特に不自由なく学校生活を自分なりにやり過ごしている。中にはその事実を受け入れず、上流階級の方々のパイプを作り、下剋上を狙っている者がいるが、多くの人間は収まる場所に収まる。

さらにもう一つ。物事には例外が付き物のように、上の例からはみ出る人たちがいる。

その例外は、とにかく一人でいることを美德とし、周囲に理解を示さない。

もちろん少数の関わりはあるが、一つのコミュニティに2、3人が限界で群れることを極端に嫌い、まるで空気のような存在がここに当たる。

おれはというと、この階層に該当する。

該当というより、今の自分になりたくてこの地位になったわけで、とにかく目立ちたくなかった。

中学の時にいやってほど目立っただし、そのせいで……。いや、やめておこう。考えるだけで鬱になる。

つまりはそういうことで、空気のようなおれにとって、クラスメイトが誰であろうと大した影響は受けないということだ。

「どうやら、俺とお前は同じ三組みみたいだ」

夏場の溶けたアイスに群がる蟻んこのような惨状の掲示板に特攻していた優介が、何かやり遂げた顔で言った。

「なんだ。また一緒か」

確か中二辺りからずっと同じクラスだ。

腐れ縁なんて言葉、なかなか使う機会なんてないと思ったけど、おれたちには本当に奇妙な縁が働いているようだ。

「なんだよー。嬉しいくせに。俺は一緒のクラスになれて嬉しいぜ。それに今回は」

「今回は……なに？」

「それがな……」

「だから、なに？」

「……なんと！ 今回はあの篠原も同じクラスだ」
「しのはら？ しのはら、シノはら、シノハラ。」

「ああ。『あの』篠原か」

篠原七海……。おれが最も関わりたくない人物だ。

上流階級の名を欲しいままにしている彼女と、クラスの空気担当のおれとではまさに水と油だ。

まあ、今まで接点などなかったから、同じクラスだからといっても心配はないと思う。

何といっても水と油だし、交わることはない。

「翠。顔が怖いぞ。目立ちたくないのはわかるがな」

「どうやら、心配事が顔に出ていたようだ。」

考え事が顔に出るのは昔からの癖だ。

「気をつけるぞ」

自分に言い聞かせるように言葉を吐き出す。

「んじゃ。そろそろ行きますか」

「うん。優介君」

「つつ。ビックした！ 急に呼び方変えんな！ お前の声、ソプラノ調なんだから、一瞬、女の子と間違えただろっ」

おれは学校内（他の生徒がいる前）では、優介のことを君づけで呼んでいる。

別に彼を敬っているわけでも、崇拜しているわけでもない。

これは一種の処世術みたいなもので……ほら、下っ端がお上に馴れ馴れしくすると、やっかむ連中が出てくるから、仕方なく、そう、仕方なく呼んでいる。

「……早く慣れろ」

だから仕方なく忠告した。

これは社会の荒波。今のおれには打破出来ないのだから、優介が妥協するしかないのだと。

第1話（後書き）

感想、間違いの指摘等々あったらよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8550j/>

something's missing

2010年10月11日16時47分発行